

サレジオ大学図書館所蔵マレガ関連資料に見る マレガによる研究と資料保護

湯上 良

はじめに

マリオ・マレガが来日し、活動した第二次世界大戦前後は、世界的にも民間所在資料の危機や、保護に向けた活動がみられた時期である。2011（平成23）年にバチカン図書館で大量に見つかった江戸時代の古文書等¹⁾、本稿で対象にするサレジオ大学図書館（以下、サレジオ大学と略記）所蔵マレガ関連資料を含めた「マレガ資料」全体が、マレガによって収集・作成された当時の民間所在資料でもある。これらの資料は、マレガ自身の収集・研究活動だけではなく、この種の資料の保護に関する一連の動向をも伝えている。

本稿で対象とするサレジオ大学所蔵マレガ関連資料は、おおまかに古典籍・江戸時代の資料とともに、マレガが作成した原稿や手紙などから構成される。このうち、古典籍に関しては、1997（平成9）年から2002年に国文学研究資料館（国文研と略）によって、バチカン図書館およびローマ郊外に所在する教皇庁立サレジオ大学図書館でマレガ関係の典籍や資料の調査が行われた³⁾。国文研前館長のロバート キャンベル氏（2021年現在。調査当時、文献資料部第4室助教授）が1997年2月のバチカン図書館調査中に、当時のサレジオ大学図書館長であったオリヴァーレス神父から情報提供を受け、サレジオ大学へ調査に向かったのが端初となった。同調査は、山下則子氏（2021年現在、国文研前副館長）によって受け継がれ、6回目のサレジオ大学調査となった2002年2月に完了し、約800点の古典籍に関して報告書にまとめられた⁵⁾。

2001年10月の第5回調査と、第6回調査に参加したラウラ・モレッティ氏は、当時のサレジオ大学図書館に所蔵されていた古典籍から古文書に至る「マレ

ガ・コレクション」を紹介した⁶⁾。

近年では、シルヴィオ・ヴィータ氏が「マレガ・プロジェクト」の成果による論文等でマレガやその活動に迫る研究を行っている⁷⁾。2019年にはマレガの生家が特定され、生家に次のような石碑が日本語とイタリア語で掲げられた⁸⁾。「サレジオ会初期宣教師団の一員であり、日本文化およびキリシタン史の優れた研究者でもあったマリオ・マレガ師は、1902年9月30日この家で誕生した。ここに敬意を表す。市民一同 2019年9月7日記」。この石碑が指摘するように、マレガはサレジオ会の宣教師であると同時に、優れた研究者でもあった。本稿では、まず先行研究で全体の詳細が明らかとなっていないサレジオ大学所蔵マレガ関連資料、そのなかでもとくにマレガが研究の過程で書き残した原稿や手紙類を中心とした資料群の構成について明らかにする。また、「マレガ・プロジェクト」によって調査・研究されたパチカン図書館所蔵マレガ資料と、サレジオ大学所蔵の関連資料との間にある関係についても触れていきたい。この点は、2000年代初頭に見られた点数よりもはるかに多くの古文書を、かつてマレガが大分や臼杵で収集したことを書き残しており、これらの資料との関係の重要性をモレッティ氏も指摘している⁹⁾。そして、これまでプロジェクトの過程で明らかになったマレガの活動や同時代の状況、およびサレジオ大学所蔵の資料や研究との対照について、アーカイブズ的な分析や資料保護の観点からの検討も目的とする。

1. サレジオ大学所蔵マレガ関連資料の構成

サレジオ大学所蔵マレガ関連資料は、大きく次の3つに分類される。すなわち、古典籍類、サブフォンド「M. Arch」、そして、サブフォンド「M. DOC」である。

先述のように古典籍類は、かつて国文研の古典籍を専門とする研究者による調査が実施されており、近年も山下氏による追加調査が行われている。

「M. Arch」については、多くが江戸時代に作成された文書類から構成され、この時代特有の文書である状物の保存に適した処置がなされておらず、激しい

劣化も見られた。このため、「マレガ・プロジェクト」の進展に伴い、2016（平成28）年5月に「M. Arch」のなかでも臼杵藩宗門方関係文書約300点を修復などのためにバチカン図書館が受け入れた。¹⁰⁾なお、これらの文書は、1953（昭和28）年にマレガからバチカンへ文書が送られた際には外れ、2005年頃、溝部脩神父によって日本から送られたもので、受入れ段階での目録も未作成であった。¹¹⁾バチカン図書館所蔵マレガ資料（フォンド・マレガ）は、プロジェクト開始当初にA1からA21のサブフォンドで構成されていたが、プロジェクトの進展に伴い、A22からA26までが追加された。¹²⁾そのうち、2016年にサレジオ大学から修復などのためにバチカン図書館が受け入れたこの約300点を新たにA24とした。¹³⁾

本稿で主として取り扱う「M. DOC」は、M. DOC 1からM. DOC 380までの全453レコードで、内容は主として原稿や手紙である。使われている言語は主としてイタリア語であるが、他にも複数の言語が使用されている。使用言語の内訳は次の通りである。単一の言語で書かれたものは、イタリア語がもっとも多い227レコード、続いて英語が86、日本語が43、フランス語が4、ドイツ語が4となっている。1つの文書内で、複数の言語が用いられている場合も見られる。イタリア語と日本語で書かれたものが46、イタリア語と英語のものが15、英語と日本語が13、また、2言語だけではなく、イタリア語と日本語と英語で書かれたものも7レコード見られる。さらに、イタリア語とフランス語が2、英語と中国語、フランス語と日本語で書かれたものがそれぞれ1つずつ見られる。また、判読や判別が難しいものも4レコード存在する。なお、レコードによっては、百数十枚もの原稿から構成され、原稿内の随所で他言語やローマ字で書かれた引用が行われる場合もある。そのため、使用言語内訳の数値は、今後の研究の進展により修正の余地があることを付しておく。

原稿類は、タイプ打ちされたものと手書きで書かれたものがあり、タイプ打ちが308件、手書きが145件見られ、割合としては、前者が68%、後者が32%となる。

「M. DOC」の特徴として本稿でもっとも着目したい点は、原稿や手紙の作成時期についてである。原稿や手紙のなかに年号等が明記されているものは117

レコードである。この資料群の構造の特徴として、特に原稿類に関しては、ある題材について初校や再校などの各段階での校正原稿が連続して収められていることが一般的である。このため、資料群の構造と内容から、年代についてある程度の類推がつかうものが一定の数見られ、その数は全453レコード中、154レコードである。残る182レコードは、年号が明記されておらず、構造や内容の面からの類推が難しいものとなる。したがって、全レコードの半数以上となる270レコード強が年号等の明記による年代確定の可能なものか、資料群の構造的に時期のある程度の類推が可能なものとなる。ただし、あくまでもアーカイブズの構造分析を通じた類推であるという点に留意し、より精緻な文書の内容に関する研究の進展が求められる。また、各レコードの間にあるつながり、たとえば、ある原稿や手紙を用意するために行った予備研究と考えられるメモなども見られることから、今後の研究によりレコード同士の関係や、作成年代が一層明確になるであろう。

この結果、1932（昭和7）年から1969（昭和44）年の間に行われたマレガの研究活動をほぼ年単位で追うことが可能となり、重要な分析の軸となりうる。この点については、次節で本資料群から見るマレガの研究活動の変遷とともに詳述したい。

全体的な構成上の特徴としては、資料群の最初と最後はさまざまな題材から構成される雑録で、それ以外も同じ内容や話題を取り扱ったものが連番で並んでいる。この要素は、本資料群を分析する上で非常に重要で、次節でも掘り下げて検討する。主要な内容物は、さまざまな言語で書かれた原稿や手紙、古文書を日本語やローマ字で翻刻したものや、それらをイタリア語に訳したものやイタリア語で解説を付したものなどである。

2. M. DOC 資料の構造とマレガの研究

前節では、サレジオ大学所蔵マレガ関連資料の構成と「M. DOC」の概要を明らかにした。本節では、原稿内に見られる年号等の情報、および構造分析から類推される時期を整理する。それによって、「M. DOC」に記載されている

1932（昭和7）年から1969（昭和44）年の間に行われたマレガの研究活動がどのような形で展開されたのか、研究や執筆の準備段階の観点から明らかにしていきたい。そして、マレガの研究における位置づけや、バチカン図書館所蔵マレガ資料との関係についても検討を加えたい。

すでに前節で全レコードの半数以上の270レコード強が年号等の明記による年代の確定が可能なものか、または資料群の構造的にある程度の時期の類推が可能であると述べた。実際に「M. DOC」を年号順に追ってみると、1932年から1969年までのマレガの研究活動をほぼ年単位で追跡することができる。ただし、1933年から36年、1954年から57年、1966年から68年に関しては、年号が明示された文書が存在しない。

各年代で取り組んでいた主題については、つぎの年表の通りである。この年表からマレガの研究がきわめて多岐にわたっていたことがみて取れ、とくに日本の古代と近世への強い関心がみられる。

つぎに時代を追って、マレガの研究についてみていきたい。来日後、『古事記』の翻訳に取り組んでいた時期は、日本神話に見る日本の起源について研究していた。

出版後の1937年の大分史談会主催による『古事記』のイタリア語訳の完成祝賀会関係の文書類も豊富に残っている。同年には、犬飼駅から東にある戸上のキリシタン墓を訪問し、調査結果をイタリア語で詳細に記している。¹⁴⁾「M. DOC」において年号が記載された、または年代が類推される文書類は、1938年から41年にかけてルイス・フロイスの『日本史』の注釈を行ったもの以外、戦前・戦中期は、大分史談会や『古事記』のイタリア語訳を出版したラテルツァ社や、トリノのサレジオ会の他、上智大学とのやり取りを中心に残っている。さらに、戯曲や俳句、愛国百人一首に関する研究も見られる。

第二次世界大戦中から戦後にかけて行われた研究の中には、日本の近世期のキリシタン統制に関するものも見られる。そのなかには、白桦藩で作成された文書類を中心としたバチカン図書館所蔵マレガ資料に関わる研究も残されている。なかでも1944年に書かれた一連の原稿はかなり詳細なもので、同図書館所蔵マレガ資料にも見られるマレガ番号が付されている文書も存在する。捕縛

すべき30名について村ごとに示した文書のローマ字書き下し文とともに、村や河川の位置を書き込んだ手書きの地図が付けられているものや、キリスト教からの棄教者がいた村の旧名と20世紀半ば当時の名称の対照表など、本プロジェクトでも平井義人氏が取り組む研究に通ずる。また、三野行徳氏は論考のなかで、久土村長熊によるキリシタンの告発について扱ったが、マレガもこの長熊の告発に注目したことが見て取れる。その他にキリシタン統制に関わる研究として、1945年から開始した江戸の切支丹屋敷に関わる研究や、1947年に行った江戸時代の殉教者に関する研究も挙げられる。とくに前者は、1960年に再度取り組み、そのなかで国文研とも関わることとなるので、後述する。

第二次世界大戦直後は、フランシスコ・ザビエル渡来400周年に向けての記念祭の準備にかかわった¹⁷⁾。また、仏典に関する研究を妙法蓮華経や般若波羅蜜多理趣経から開始し、東大寺のお水取りや二月堂に関する研究も熱心に行った。また、大仏や八幡信仰、薬師如来、地藏と阿弥陀などの仏像について執筆もした。仏教以外にも神道や諏訪の御柱祭、天理教に関する原稿も残されている。

1950年代に入ると、日本研究をより深化させ、古代から近代までの宗教について研究を行った。日本におけるネストリウス派の影響に関する研究は、その後さまざまな主題での研究につながった。さらに古語拾遺に関する研究も行ったが、後にも再び取り組むこととなる。キリシタン墓の研究も引き続き行っており、戦後直後でもトリノのサレジオ会やバチカン、NHKや上智大学、大阪星光学院など国内外のさまざまな機関とやり取りを重ねている。

年代が類推できない文書のなかにも、マレガがこれまで取り組んできたとみられる研究の手書き原稿のリストや、「日本におけるサレジオ会の布教」という題で、日本の歴史や神道、仏教、習俗、日本におけるキリスト教の歴史、大分でのサレジオ会による布教、忠臣蔵、灯籠、ザビエル研究、そしてバチカン図書館所蔵のマレガ資料を基盤とした豊後での迫害に関わる大分の古文書といった、これまでのマレガ研究の集大成的な著作の検討過程が見られる重要な文書が「M. DOC」内に収められている¹⁸⁾。

他にも古代史や伝説、古神道や古代の仏教、聖徳太子などに留まらず、古語拾遺や今昔物語についての原稿などから、日本の古典文学にも造詣が深かった

年表 マレガの研究主題

年 代	内 容
1932	日本神話に見る日本の起源
1937	大分史談会主催 古事記イタリア語訳完成祝賀会 戸上キリシタン墓訪問、トリノのサレジオ会からの手紙
1938	上智大学とのやり取り、マレガ宛の手紙、新聞の切り抜き ルイス・フロイス『日本史』注釈（1938 - 1941）
1939	寺子屋に関する戯曲、マレガを紹介する文章 ラテルツァ出版社とのやり取り
1940	ラテルツァ出版社・上智大学とのやり取り マレガ宛の手紙、徳川幕末各藩領域圖
1941	鉄輪（カナワ）に関する戯曲
1942	大分史談会とのやり取り
1943	愛国百人一首、俳句
1944	棄教者の村と同時代の対照表等
1945	切支丹屋敷（1945 - 1946）
1947	江戸時代の殉教者、白杵土木事務所管内圖
1948	ザビエル渡来400周年祭準備、仏典研究（妙法蓮華經） トリノ・サレジオ会とのやり取り、古代から近代までの日本での布教
1949	ザビエル渡来400周年祭と原稿、仏典研究（般若波羅蜜多理趣經）
1950	日本におけるネストリウス派、古語拾遺、雑録
1952	ザビエル追悼400周年、日本研究 仏典研究（延命地藏菩薩經、方廣大莊嚴經） バチカン国務省モンテイーニ師への大分市長からの手紙
1953	キリシタン墓、天理教、日本人の宗教観
1958	七福神
1959	NHK・上智大学・大阪星光学院とのやり取り
1960	日本におけるキリスト教、勸進
1961	切支丹屋敷（文部省史料館山口栄藏氏との面会）、閻魔大王

1962	切支丹屋敷、能、節分、大阪平松氏とのやり取り
1963	切支丹屋敷に関する発表（第8回日本での東洋関連国際講演会）
	今昔物語、お水取り、閻魔大王、古本即売会カタログ
1964	秦氏、古神道
1965	古語拾遺、シドッティ、お水取り、マレガ宛の外国からの手紙
	日本におけるカトリック教会
1969	古語拾遺
1970	ドン・ボスコ社からマレガへの印税の知らせ

ことがわかる。日本文化一般についても筆を進めており、能や歌舞伎、忠臣蔵、日本の習俗や昔話、貨幣、茶道、江の島や鎌倉についてなど、取り上げた話題は多岐にわたる。

さらに、日本以外にも目を向け、孔子や仏陀、その弟子の目連についても研究を進め、真言宗に見るネストリウス派の影響や秦氏の起源についても多くの関心を寄せている。また、サレジオ会の宣教師として日本、とくに大分での会による布教や活動についても書き残している。

また、江戸時代の古文書のイタリア語訳や書き下し文等で、元の文書の年代がわかるものも10レコード存在する。寛永期の雲仙等での殉教者に関する文書や、1699（元禄12）年や1742（寛保2）年の御仕置五人組帳に関するものなどである。²⁰⁾

こうした研究のなかでも切支丹屋敷に関わる研究は、戦後すぐに、そして1960年代には複数年にわたって行われ、論文²¹⁾や、国際講演会²²⁾で発表された。マレガはこの調査の過程で、現在の国文学研究資料館の前身であり、発足から10年ほどが経過した1961年に文部省史料館（1951年開館）でも調査を行い、同館の山口栄蔵氏と面会した。

マレガは、山口栄蔵氏について次のように言及している。「史料館には、文部省からの出向者である正式な館長がいるが、実質的には山口氏がその役割を果たしていた²³⁾。実際にこの時期の職員名簿によれば、山口栄蔵氏が1951年4月から62年1月の任期で「文部事務官研究職」として、岡野澄氏が1950年から66年（いずれも月の記載無し）の任期で「大学学術局審議官兼文部省史料館

長」として、吉里邦夫氏が1961年（月の記載無し）から1965年6月1日の任期中で「文部省大学学術局学術課長兼文部省史料館長」として、それぞれ名前が挙げられている²⁴⁾。

第二次世界大戦後の民間所在を主とした史資料の危機的な状況をうけて、学会を中心に活発となった史料保存運動や史料館設立運動が起こった。その流れのなかで、財閥解体の影響から閉館していた三井文庫の土地を文部省が買い取り、文部省史料館が1951年5月に設立された。したがって、当時の文部省史料館には各地の民間所在資料だけではなく、旧三井文庫に収蔵されていた資料も寄託された²⁵⁾。山口氏自身も戦前の1939年5月から三井文庫に勤務し、戦時中は山梨県への史料の疎開にも従事した。1958年には、東京大学経済学部の講師も務め、文部省退官後に1965年5月に開館する三井文庫の創立準備作業に携わった²⁶⁾。

マレガが史料館を訪れた目的は、まさにその旧三井文庫に所蔵されていた通称「三井地図」と呼ばれる地図の閲覧であった。「M. DOC」内に文京区の地図が見られる²⁷⁾が、江戸時代に切支丹屋敷が建っていた場所は、現在の小日向界限であった。マレガによれば、山口氏の子息が師範学校付属の小学校に通学していた頃、切支丹屋敷のあった場所の近くに住んでいたようである²⁸⁾。マレガが閲覧した地図は、大きさが180cm×140cm、鳥の子紙製であった²⁹⁾。三井文庫が定期的に発行している論集の記念号の中に閲覧に訪れたマレガと地図が共に写る写真と、その一部始終が掲載されており、「M. DOC」でマレガが書き残した内容を裏付けている³⁰⁾。

なお、現在の国文研に所蔵されている「史料館文書」の1961年度（昭和36年度）に関わる文書を閲覧したが³¹⁾、筆者管見の限りではマレガの訪問に直接関係する記録を見出すことができなかった。マレガは、切支丹屋敷を描いた地図について、かつて切支丹を収容した場所に住んでいた間宮庄五郎が嘉永年間（1848～55）に描いたということを「M. DOC」内で書き残している³²⁾。国文研の収蔵物内にも、嘉永年間の江戸切絵図がリスト化された「史料館文書」があり³³⁾、また、戸松昌訓の『東都小石川絵図』に「ニ忒 キリシタンサカ」、「ほ忒 間宮庄五郎」という記載があることから、これらを参考にしながら、原稿を書き進めたことも考えられよう³⁴⁾。

3. バチカンへの手紙の草稿と資料保護

現在バチカン図書館に所蔵される1万数千点以上の「マレガ資料」の送付時期や動機について、マレガが書き残した多くの原稿等のなかに書かれているかどうかは、重要な論点の一つである。収集や作成された文書の多くは、1953（昭和28）年にバチカン図書館へ向けて送付された。送付の直接的な動機についてははまだ判明しておらず、本稿で対象としているサレジオ大学所蔵の「M. DOC」のなかにも動機について直接言及した文書は、管見の限り見られない。

しかし、バチカン図書館へ資料を送付したのと同じ時期に書かれた手書きのイタリア語による手紙の草稿が数点存在する。これら草稿の内容は、マレガによる研究内容と深く関わる点も多い。大分市長名で書かれたバチカン国務省のモンティーニ師宛のものと、同じく大分市長名で書かれたピオンディ枢機卿宛のものがそれに当たる。ジョヴァンニ・バッティスタ・モンティーニは、1937年12月から1954年11月まで国務長官代理や副国務長官を務め（1944年8月以降の国務長官は空位で、実質的にモンティーニが担う）、1963年6月に教皇パウルス6世となる人物である。ピエトロ・フマゾーニ・ピオンディは1919（大正8）年から1921年まで日本で初代教皇使節を務め、その後に布教聖省の役職を歴任し、日本とバチカンのパイプ役となった。³⁶⁾

まず、モンティーニに宛てられた手紙の草稿を見ていこう。この1952年10月付けの草稿は、400年前にフランシスコ・ザビエルが日本滞在最後の数か月を大分で過ごした内容から始まる。当時のカトリック宣教において、大分が重要な地であり、遺物やキリスト教徒の墓などが見つかることを紹介する。そして、徳川政権による宗門改めの文書には、捕縛された多数のキリスト教徒の名前が見られることを指摘している。

「こうした文物は、すべて私有財産の状態にある。日本では、木製の家屋内でこうした歴史的価値をもつ文物が保存されているため、火災により失われることが多々ある。大分の各地域に散財するキリスト教徒の墓は、露天の状態で、雨による被害を受けている」

“Tutti questi cimeli sono ora in mano di privati. Il Giappone, causa i continui incendi, va continuamente perdendo questi cimeli storici conservati in case di legno. Le varie pietre cristiane poi sparse nella regione, vanno deteriorandosi lasciate come sono all’aperto, sotto l’influenza selettiva della pioggia³⁷⁾”

こうした状態を改善するため、かつて「デウス堂」と呼ばれたカトリック教会が建立されていた場所に記念博物館を建設し、大分のみならず、可能な限り日本中からキリスト教関連の文物を収集すること、そして、かつて存在したデウス堂や医療センター、寄宿学校や孤児院を追憶する施設の建設を構想した³⁸⁾。

在バチカン日本国代理公使の金山氏にもこの構想への支持と助力を何度か請うたことも書き添え、モンティーニにも同様の要請をした。また、同内容の手紙をピオンディにも送ることが書き添えられた³⁹⁾。

しかし、ピオンディに宛てた手紙の草稿は、モンティーニへの簡潔な草稿とは異なり10枚以上の分量で⁴⁰⁾、内容も詳細に書かれている。起草された年月日について直接の記載はないが、「市長に選ばれてから5年が経過した⁴¹⁾」とあることから、1952年に書かれたものと推定される。

まず草稿は、モンティーニ宛と同じくフランシスコ・ザビエルの話から始まる。そして、1553年には病院、1555年には著名な医師でもあるルイス・デ・アルメイダによって養育院が開設され、彼はその2年後に病院を拡張し、医学校も開設し、都からも学生が集った⁴²⁾。なお、M. DOC 77には、ザビエルに関連してアルメイダについてマレガが行った研究があり、ザビエルの日本での旅程を記した地図も残されている⁴³⁾。

1582（天正10）年に大友宗麟は、伊東マンショらを教皇グレゴリウス13世の元へ派遣し、その後2年にわたり、ザビエルを列福するよう請願する書状を書き送った。これは、「おそらく列福を求める初めての請願⁴⁴⁾」であったことを記した。

また、1587（天正15）年に府内が日本で最初の司教区になったことや、初期の歴代司教についても記述した⁴⁵⁾。なお、M. DOC 80にも歴代司教についてマレガが研究したとみられるメモ書きが残されている⁴⁶⁾。

さらに草稿は続く。各地に大名が割拠した時代は、キリスト教も信仰の自由を謳歌したが、徳川政権下で迫害が開始され、拷問や死刑で多くの者が殉教した。1614（慶長19）年から1634（寛永11）年までの長崎や中津、竹田、佐伯などでの殉教者の名を挙げ、『豊後切支丹史料』を引き合いに出しながら、12人の殉教者にも言及した⁴⁷⁾。また、江戸時代を通じて信仰を保ち続けた名もなき人々にも触れ、「佐伯の文書によると、1817（文化14）年になってようやく地域内の最後のキリスト教徒がいなくなった」⁴⁸⁾ことも記載した。また、殉教者たちがどこに埋葬されたかはわかっておらず、かつてデウス堂が建てられていた場所にある木の板と梁のみを例外として、記念碑も存在しない。なお、このデウス堂跡へ1949年にギルロイ枢機卿が訪問したことも記載されている。シドニー大司教ノーマン・ギルロイ枢機卿は、ザビエル渡来400周年の折に教皇特使として来日し、スペインから持ち込まれたザビエルの聖腕とともに日本各地を訪問した⁵⁰⁾。

そして、この草稿の核心に入る。大分地域では、墓や文書、マリア観音と呼ばれた像、織部灯籠、十字で飾られた物品などキリスト教に関連する多くの遺物が発見されている。しかし、こうした遺物の保存環境が整っておらず、継承の問題を指摘する。

「こうした紙や木でできた物品が墓を除き、すべて私人である所有者のもとで保存され、毎年のように起こる火事で多くの家屋が崩壊し、それによって物品も灰塵に帰す。また、道路工事の際などにもそのまま失われることもあり、こうした状況は大分だけではなく、日本中で見られる」

“Tutti questi oggetti, eccetto le pietre tombali, sia di carta o di legno, conservati da privati. Gli incendi che scoppiano ogni anni e distruggono pur numero di case, portano con se anche la distanziare di tali reliquie storiche. Per le pietre sparse mezzo ai monti, aperta che vengono perse la gente ignorante per curarle nelle lavori delle riparazioni delle strade. Tale stato di cose favole non solo a Oita ma in tutto il Giappone”⁵¹⁾

これらの遺物を収蔵し、展示・閲覧が可能な博物館の建設を提案した。同時に、

「もし過去の遺物を今収集しなければ、おそらくかなりの確率で将来にわたっても収集が行われな⁵²⁾だろう」

“Se non si raccolgono ora le relique del tempo passato, è molto probabile che non lo si farà più”

とも述べ、緊急性の高さも訴えた。

建設に関しての具体的な計画や数値も列挙する。対象となる土地の面積は7000坪で、博物館と図書館、公園も併設し、日本人だけではなく、外国人も研究の場として利用できること、総額で2億円必要なことを記した⁵³⁾。本来であれば、大分市が拠出すべきであるが、戦後の復興のため、文化的事業に用いられる予算はなく、全世界から資金を集める旨を訴えた。大分出身の明治期の音楽家滝廉太郎の像を建立する際、資金を集めるために鉛筆を売った前例を紹介し、竹製の十字架や人工真珠の数珠、殉教者等を描いた絹絵といった物品を全世界のカトリック教徒に向けて販売し、資金を集める構想を述べた⁵⁴⁾。

こうした計画は、各地の人々にも賛同を得ていることも記された⁵⁵⁾。大分のカトリック教徒や文化団体をはじめ、当時、大分担当の宣教師モーロ師や、宣教師を長年務め、キリシタンに関する研究を行っているマレガ、そして、大分を管轄する福岡司教の深堀仙右衛門師から同意を得、深堀司教からビオンディ枢機卿へ手紙を送ることが約束されたという。また、金山正英公使にも話をしたところ、大分まで視察と激励に訪れ、「巨額の資金を集めることは容易ではなく、教皇ピウス12世の賛同も得たい⁵⁶⁾」という要望が述べられた。この時点でキリスト教徒になっていない者がこうした要望を行うことは普通のことではないが、プロジェクトの重要性を鑑みて、教皇の支持を得たい旨が書き添えられ、草稿が締めくくられる。

M. DOC 3の最後の1枚には、土地の購入や補償、土地や道路の整備、公園や博物館の敷設、遺物の収集等、博物館建設に関わる諸経費の概算についてのメモ書きも付されている⁵⁷⁾。

おわりに

ここまで見てきた2通の手紙のイタリア語による草稿の要点について、まとめる。まず、1952（昭和27）年10月付のモンティーニ宛だが、多くの捕縛者の名前が書かれた文書から、かつてキリスト教が盛んに信仰されていたことが記されている。江戸時代に書かれ、現在はバチカン図書館に所蔵されている古文書の研究の賜物であろう。そして、こうした文書は民間で所有され、日本の家屋が木で造られているため、度重なる火災で失われつつあること、それらを守るために博物館の建設を考えていることが簡潔に述べられ、ピオンディ枢機卿にも同内容で手紙を送ることも付されている。

一方で、ピオンディ枢機卿宛の草稿もその内容や、モンティーニ宛の草稿の内容も考慮すると、1952年に書かれたと考えるのが妥当であろう。モンティーニ宛のものとは異なり、大分のキリスト教徒の歴史や、博物館建設を願うまでの過程や動機について詳細に書かれている。サレジオ大学所蔵マレガ資料内に見られるさまざまな研究や、『豊後切支丹史料』が下地となっている内容も読み取れる。手紙の送り主とされる上田保市長は、1949年6月にザビエル渡来400周年を記念して来日した教皇庁代表らの大分入りに際し、デウス堂跡への案内を行った。彼の晩年の発言によれば、「この時期では、デウス堂の存在を知っていただけで、府内が西洋音楽や育児院、西洋式病院の発祥の地だとは知らなかった⁵⁸⁾」ようである。それからたった3年ほどで上田がここまで、詳細な内容を独力で書くのは、かなり困難であったろう。マレガは単に手紙をイタリア語へ翻訳したわけではなく、日本の古文書やヨーロッパの古典籍等にもあたって自身が行った各種の研究を手紙の草稿の基盤としたことが考えられる。

また、ピオンディ宛の草稿でも、簡潔に書かれたモンティーニ宛と同じく、火災や工事によって民間で所有されているキリスト教関連の遺物が失われる危険があることを指摘した。加えて、大分だけの事象ではなく、日本各地で見られる状況であると述べている。この草稿の作成に何らかの形でかかわったマレガ自身もこの事実や意識は、共有していたであろう⁵⁹⁾。そして、博物館だけでは

なく、キリシタン関連の文書も収蔵する図書館も併設し、研究者に開放する旨も記されている。

これら2通の手紙の草稿には、いずれにも収集文書がバチカンに送られた直接の動機とみられる内容は書かれていない。しかし、日本で収集された文書がバチカンに向けて送付されたという内容の手紙が、東京の教皇庁大使館からモンテニーニへ向けて送られたのは1953年8月14日付である。また、モンテニーニからバチカン図書館へこの文書に関する手紙が送られたのが同年12月18日である⁶¹⁾。先の大分市長名で書かれた2通のイタリア語による手紙の草稿に記された時期(1952年10月)や、日本の民間所在資料を取り巻く脆弱な環境や危機的状況を訴えるといった内容を鑑みると、バチカンに収集文書が送付されたタイミングがあまりにも合致しているように思えてならない。また、民間所在資料の保護の役割も担うこととなる文部省史料館が1951年に設立されたこともまた、影響を与えなかっただろうか。

サレジオ大学所蔵マレガ資料の特徴として、原稿推敲時から完成稿に至るまで各段階の原稿が残されている。他の手紙類も下書きや実際に送付した手紙の控えが残されていることが多い。ところがこの2通の手紙の草稿に関しては、実際に送付した手紙の控えは、資料群のなかに残っていない。したがって、今後の課題として、これらの手紙は大分市長名で実際にバチカンへ送付されたのか、されたとすれば、大分側に送付した手紙の控えや、バチカン側でも受領されたのかを確認する必要がある。その過程で1953年前後になぜバチカンに収集文書が送られたのか、その動機が明確になることを期待したい。

註

- 1) 2013(平成25)年にバチカン図書館と人間文化研究機構との間で結ばれた協定に沿い、バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ資料の調査と研究、通称「マレガ・プロジェクト」が開始された(研究代表者:大友一雄)。2021年度終了予定。同資料の調査・研究の概要については、本書所収の青木睦・太田尚宏・大友一雄「マレガ資料群の調査・保存と情報資源化」を参照のこと。
- 2) バチカン図書館と人間文化研究機構で結ばれた当初の協定では、教皇庁立サレジオ大学での調査を見込んでいなかった。その後、科研費により、マレガが収集・作成した資料全体の国際資源化に関する研究活動や基盤構築が可能となった。この活動は、サレジオ大学と同大学図書館の協力によって円滑に進められた。サレジオ大学のマウロ・マントヴァーニ前学長

- il magnifico ex-rettore Mauro Mantovani、同大学図書館のマルチェッロ・サルデッリ館長
il direttore Marcello Sardelliにこの場を借りて御礼申し上げる。
- 3) 当時の一連の調査については、次の著作を参照。ロバート キャンベル「マリオ・マレガ文庫」(『文学』2001年5・6月号、岩波書店)、34-38頁。山下則子「マリオ・マレガ文庫所蔵日本古典籍の調査と整理」(『国文学研究資料館報』第59号、2002年)、4-5頁。
 - 4) 山下氏には、筆者が国文研在籍時から当時の調査についてご教示を賜った。この場を借りて御礼申し上げる。
 - 5) 国文学研究資料館文献資料部編「サレジオ大学マリオ・マレガ文庫所蔵日本書籍目録」(『調査研究報告』第23号、2002年)。
 - 6) Laura Moretti, 'Il Fondo Marega, Contenuti, potenzialità e significati della collezione di un singolare missionario-nipponica', *Salesianum*, 68 (2006), Università Pontificia Salesiana, pp. 745-781.
 - 7) ヴィータ氏は論文や発表を数多く行っているが、とくに本稿の内容に関わる次の論文2点を挙げる。シルヴィオ・ヴィータ^㉔「豊後キリシタンの跡をたどるマリオ・マレガ神父 —マレガ文書群の成立過程とその背景—」(『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第12号〈通巻第47号〉、2016年)、149-169頁、および^㉕「マリオ・マレガの執筆活動とその『文脈』」(『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第14号〈通巻第49号〉、2018年)、131-146頁、いずれも本書所収。
 - 8) 生家の特定を記念し、式典等も行われた。モッサ市の市長や記念行事のスポンサーであるフリウリ・ヴェネツィア・ジューリア農工金融公庫の頭取、ヴィータ教授や大分県立先哲史料館の大津祐司館長(当時)によるスピーチ、最後にモッサ教区のモリス・トンソ主任司祭による祝福と聖水撒布が執り行われた。関係各位、とくに運営に当たった国立ゴリツィア文書館の館長マルコ・プレスニカー博士il direttore Marco Plesnicarにこの場を借りて御礼申し上げる。
 - 9) L. Moretti, 'Il Fondo Marega', cit., p. 765.
 - 10) 「M. Arch」の一部がバチカン図書館に受け入れられる以前から、マレガ・プロジェクトにおいては、日本の古文書の修復技術がバチカン図書館の修復士たちに伝えられていた。詳細は、アンヘラ・ヌーニェス=ガイタン Ángela Núñez-Gaitán (拙訳)「マレガ神父収集文書の整理と保存 —バチカン図書館と日本による共同調査と交流」(『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第12号〈通巻第47号〉、2016年)、171-180頁(本書所収)や、註1青木・太田・大友論文を参照。
 - 11) 大友一雄「マリオ・マレガ資料の概要 マリオ・マレガ資料群概要(フォンドレベル)」(『バチカン図書館所蔵マレガ神父収集豊後切支丹史料 —概要と紹介—』日本語版、マレガ・プロジェクト〈国文学研究資料館〉、大友一雄・三野行徳編、2021年)、6頁。
 - 12) 詳細は、註11前掲書。
 - 13) A24資料群の概要や伝来等の詳細については次を参照のこと。佐藤晃洋「マリオ・マレガ資料の概要 A24」(『バチカン図書館所蔵マレガ神父収集豊後切支丹史料 —概要と紹介—』日本語版、マレガ・プロジェクト〈国文学研究資料館〉、大友一雄・三野行徳編、2021年)、66-68頁。
 - 14) L. Moretti, 'Il Fondo Marega', cit., pp. 749, 771 および本書所収の田中裕介「マリオ・マレガのキリシタン史跡調査 —1937~38年—」を参照。
 - 15) Università Pontificia Salesiana, Fondo Marega, M. DOC (M. DOCと略) 344, cc.4, 13. 文書

に記されたマレガ番号は、782, 784である。平井氏の研究については、本書所収の平井義人「白杵藩におけるキリシタンの数と分布」を参照。

- 16) M. DOC 344, cc.15. 文書に記されたマレガ番号は、783, 781, 789である。詳細は、三野行徳「白杵藩宗門方役所とキリシタン統制」(『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第14号〈通巻第49号〉、2018年)、153-154頁、および松井洋子・佐藤孝之・松澤克行編『魅る「豊後切支丹史料」』(勉誠出版、2020年)、48-49頁。マレガは、告発された者の人数を13名としているが、佐藤孝之氏によれば、これは1名重複して数えているためである。
- 17) フランシスコ・ザビエルの渡来400周年関連の文書は、バチカン図書館所蔵のA21にも見られる。詳細は次を参照のこと。佐藤孝之「マリオ・マレガ資料の概要 A21」(『バチカン図書館所蔵マレガ神父収集豊後切支丹史料 一概要と紹介―』日本語版、マレガ・プロジェクト〈国文学研究資料館〉、大友一雄・三野行徳編、2021年)、58頁。
- 18) M. DOC 25.
- 19) M. DOC 112, 113.
- 20) 年代順にM. DOC 323, 324, 325, 327, 11, 210, 211, 21, 217。雲仙に関する文書には「グループT」の記述が、寛保期に関する文書にはマレガ番号「B 360」が見られる。マレガ番号については、本書所収の高見純「宣教師によるキリシタン統制文書群の収集と整理 ―マレガ目録の分析から―」を参照。
- 21) M. DOC 61, Mario Marega, 'The Kirishitan Rōyashiki', Japan Missionary Bulletin, 16, 1962, pp. 104-111.
- 22) M. DOC 56, Mario Marega, The First and Second Kirishitan, in 8th International Conference of Orientalists in Japan, June 7 and 8 1963.
- 23) M. DOC 46, c.1: "Il direttore ufficiale dell'archivio, è un membro del ministero della Pubblica Istruzione, ma il vero direttore locale è il signor Yamaguci Eizo, già professore d'università".
- 24) 「歴代史料館員一覧」(国文学研究資料館史料館編『史料館の歩み四十年』国文学研究資料館史料館、1991年)、105頁。大友一雄・筒井弥生「文部省史料館における公文書館的機能拡充構想関係文書」(『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』第9号、2013年)、157頁。
- 25) 松本四郎「史料館と三井文庫」(『史料館の歩み四十年』国文学研究資料館史料館編、国文学研究資料館史料館、1991年)、66頁。当時、山口氏が古文書読解において、周囲に頼られたことも記載されている。また、M. DOC 14では、マレガが山口氏の古文書解説を得たことが見て取れる。
- 26) 中井信彦「研究員 山口栄蔵氏を悼む」(『三井文庫論叢』通号9、1975年)、6頁。
- 27) M. DOC 62, 『東京都区分詳細圖⑤文京區』日地出版株式會社、昭和36年4月。
- 28) M. DOC 46, c.1: "Ora, questo signor Yamaguci abitava nelle vicinanze del terreno che olim era stato adibito per confinare i cristiani più influenti. Ciò fu dal 1935, fino al 1940, ossia nel tempo in cui suo figlio frequentava le scuole elementari dipendenti dalla scuola normale Shihangakko, che era pure vicina al terreno dell'ex Kristan Yashiki".
- 29) M. DOC 51, c.1: "La Mitsui Map del Mombusho Shiryokan a Shinagawa. 180 cm per 140 cm. carta giapponese Tori-no-ko".
- 30) 大塚陽子「史料をみる人、みせる人」(『三井文庫史料 私の一点』(『三井文庫論叢』第50号別冊)、2017年)、44-45頁。同書は、『三井文庫論叢』の50号到達と史料公開半世紀を記念し

たものである。なお、同書の執筆者の一人でもある国文研の渡辺浩一氏に同書をご教示いただいた。この場を借りて、感謝申し上げる。

- 31) 閲覧した資料は次の通りである。国文学研究資料館所蔵「史料館文書」A1-13, 215, 343, 360, 361, 362, 545, 547, 548, 562, 601, A2-1, 2。
- 32) M. DOC 57, c.1: “The first map of the Kristan Yashiki that appeared on books, magazine, and Dictionaries, was drawn by a hatamoto during the Tokugawa era. His name is Mamiya Shogoro, He had a big yashiki on the compounds of the abolished prisons for the Christians. His name is printed on the maps of the Ka-ei era 1848-1854. There is a good and clear exemplar in the Kiri-e-zu of the 7th year of Ka-ei, the Koishikawa-ezu Map”.
マレガの草稿全体に見られることだが、脚註が無く、記載があったとしても文章内で簡易に括弧書きを付すのみで、引用元をたどるのが困難な場合が多い。
- 33) 国文学研究資料館所蔵「史料館文書」A1-361「三井文庫寄託地図目録其二」C602。
- 34) 戸松昌訓『東都小石川絵図』麴町（江戸）：金鱗堂、安政4年（1857）。
- 35) 註7 ヴィータ④論文、159頁。
- 36) 註7 ヴィータ④論文、154-155頁、162頁。モンテイーニの正確な役職名は「Prosegretario di Stato」で、枢機卿のみが「Segreteria di Stato」に就任する慣習となっている。
- 37) M. DOC 4, cc.1-2.
- 38) デウス堂は顕徳寺とも呼ばれ、マレガ滞在当時の地図上に寺の位置を書き記した手書きの原稿がM. DOC 378に見られる。
- 39) M. DOC 4, cc.3.
- 40) M. DOC 3. 同草稿右端のメモによれば、「ペン書き13枚、鉛筆書き3枚」とあるが、M. DOC 3内に実際見られる枚数は14枚である。
- 41) M. DOC 3, c.1: “Sono già 5 anni da che venne eletto sindaco di presta città”. 大分市長の上田保氏は、1947（昭和22）年に市長に就任した。
- 42) M. DOC 3, c.2.
- 43) M. DOC 77, c.1. この文書ではザビエル「渡来」ではなく、「追悼」400周年としている。マレガは、アルメイダに関する研究でルイス・フロイスの『日本史』等の著作を参照している。現代の大分にもアルメイダの名前を冠した「大分市医師会立アルメイダ病院」が開設されている。
- 44) M. DOC 3, c.3: “Con molta probabilità il principe Sorin fu il primo a chiedere la beatificazione del Saverio”
- 45) M. DOC 3, c.4.
- 46) M. DOC 80, c.1.
- 47) M. DOC 3, c.6.
- 48) M. DOC 3, c.6: “Dai documenti della regione di Saeki sappiamo che sol nel 1817 si estinse l'ultimo dei cristiani della regione”. 註16松井他前掲書、174頁にも所収。
- 49) M. DOC 3, c.7.
- 50) 阪野祐介「宗教的式典と国家：ザビエル渡来400年祭を事例に」（『兵庫地理』第57号、2012年3月）30頁。
- 51) M. DOC 3, c.8.
- 52) M. DOC 3, c.9.

- 53) M. DOC 3, c.10.
- 54) M. DOC 3, c.10.
- 55) M. DOC 3, c.11.
- 56) M. DOC 3, c.12: “Capisco che il raccogliere duecento milioni di yen non è cosa facile. spero di ottenere anche l’approvazione del Santo Padre Pio XII”.
- 57) M. DOC 3, c.14.
- 58) 中川郁二『ロマンを追って 一元大分市長上田保物語』（大分合同新聞社、2008年）10章8頁（デジタル版）。
- 59) 実際に、イタリアやバチカンでは20世紀初頭に民間所在資料の保護への関心が高まり、1939（昭和14）年には国の機関である文書保護局が全国各地に設置され、保護活動を本格的に担うこととなった。拙稿「非国有アーカイブズと公的保護 ―イタリアにおける国家機関の創設―」（『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第13号、2017年）、51-60頁を参照。
- 60) Lettera dell’Internunziatura Apostolica, N. 666, Tokyo, 14 agosto 1953.
- 61) Lettera della Segreteria di Stato di Sua Santità, N°. 306945, Dal Vaticano, li 18 dicembre 1953. 現在、バチカン図書館に所蔵されている文書の受入れにあたり、バチカン側でやり取りされた一連の手紙については、バチカン図書館東洋部門の責任者であるデリオ・ヴァニア・プロヴェルビオ博士 il dott. Delio Vania Proverbio より情報提供を受けた。博士にこの場を借りて感謝を申し上げる。

本稿は、科学研究費基盤研究（A）「バチカン図書館所蔵豊後切支丹資料の国際的情報資源化に関する海外学術調査研究」（研究課題番号：16H02723）および基盤研究（C）「20世紀の日本・イタリア・バチカンにおける民間所在資料や地方公文書の管理」（研究課題番号：17K03053）の成果である。

Ringrazio a tutti coloro che avete collaborato, indicando i vostri nomi in alfabeto accanto alle dediche scritte in giapponese.